チームの中での自分の役割と地域の課題

15FF1796　小松雅臣

①　自分の成長と気づきについて

２年のゼミではすぐにサービスラーニングに向けてグループ分けをし、グループ活動に移った。私は人見知りで自分ではコミュニケーション力が無いと思うので、グループワークが嫌いだった。ただ、今回のサービスラーニングのグループのメンバーはとても明るく、人柄のいい人が集まったグループだったので、自分にとって居心地のいいグループとだったと思う。そんなメンバーでサービスラーニングの打ち合わせや訪問先である社会福祉法人むそうと連絡を取り合うなかで、私も何か協力したいと思うようになり、失敗することはあってもサービスラーニングを充実させ、悔いを残さないような活動にしたいと思った。

後悔しないようにするにはやはり何事も妥協しないことだと思う。企画を考える際もお祭りの企画について高齢者から子供、障害を持っている人までどんな人にも出来る事を考えた。ただ、企画を考えることだけでも難しいことで、予算も限られているし他のお祭りの屋台と被らないようにも意識し、自分たちのやりやいことについて意見が分かれることもあったが、そんななかでも最後まで話し合いを進めみんなが納得のいく企画を決めることが出来た。企画以外にも、むそうの就労支援の活動を体験させてもらったときにも活動先の方が説明をしてくれる時にただ聞くだけじゃなく、疑問を持つようにしてさらに内容を深め、そこから自分の考えを持つようになった。私がこれまで一番妥協していると感じる部分はメンバーみんなで行う活動とは別に一人でも行えるような作業があったときに、誰かがやってくれるから自分はやらなくてもいいと思うことである。人任せにしてしまうことはよくないことなのはもちろん分かっているのだが、「面倒だなぁ、誰かがやるだろ」と思い人任せにしてくることが多かった。しかし、グループ活動でそんな状況だと雰囲気が悪くなり、私の目指すものでは無くなってしまうと気づくことが出来た。連絡を取る場面やグループ学習をする際の机の移動など、小さなことまで自然と自ら動くようになったと思う。

②　活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

私たちの活動先社会福祉法人むそうでは地域のお祭りに参加し、お祭りを盛り上げるという形で地域との関わりというものが見えた。関わり方としては、屋台で食べ物を売ったり、金魚すくいやヨーヨー釣りといった出し物で地域の方をお客さんとした関わり方と盆踊りを一緒に踊ったり、お祭りの企画・運営を一緒にしたりする関わり方もあった。私もお祭りに参加して感じたことは、むそうが地域のお祭りでなくてはならない存在であるように思った。なぜならむそうがお祭りの屋台の大部分を占めていることと、お祭りの会場の年齢層が変化していることであると思う。地域の小さなお祭りであるので屋台を出す人も限られているためむそうが屋台をだすということはお祭りを盛り上げるのにはかなり力

になっていると感じた。そして、お祭りに年齢層の変化についてはこのお祭りの関係者は高齢な方が多くみられた。そして来場している人たちは子供とその親、もしくは子供だけで来ているというケースが一番多く見られた。そのためお祭りの会場の年齢層は 60 歳から 80 歳の高齢者の層と 3 歳から小学生あたりの子供の層が多いように思う。人口ピラミッドで表すなら砂時計型になるだろう。実際に私の体感としては子供の数が圧倒的に一番に多く、次にお年寄りが多くみられた。しかし、むそうの職員の方たちが加わることで年齢層に大きな偏りがなくなり、子供を中心としたにぎやかなお祭りが成り立っていると思った。

サービスラーニングの活動を通して若い大人の世代の地域への関わりが無くなっているように感じた。その若い大人の世代が 60 代となったとき、その世代が今回のお祭りのように高齢者を中心とした主催が出来るのだろうか、お祭り自体無くなってしまうのではないだろうか。若い大人の世代の地域への関係の希薄化が地域の伝統や風習といったものを受け継ぐことが出来ずに消えてしまう可能性があることが問題であると認識することができた。そして、いかにして若い大人の世代に参加してもらう、もしくわ巻き込んだ地域活動をして、地域活動の中心を若い世代していくかが、伝統や風習を後世に伝えていくための必要な課題であると思った。

福祉と地域の信頼関係

15ff4022　蓑輪　昇吾

①自分の成長と気づきについて

この一年間を振り返っていろんな体験や経験をした。まず一番印象に残っているのは夏に行ったサービスラーニングである。このサービスラーニングでは「社会福祉法人むそう」へ行き支援の方々の仕事を見学してお手伝いをしながら、最終的にむそうが毎年参加している地域の祭りに自分たちの考案した屋台を出して祭りを盛り上げるのを目標に取り組んだ。そこで私たちは４人チームになりみんなで意見を出し合い、くじ引きの屋台を出しいろいろ問題は起こりましたがみんなで臨機応変に対応して無事に盛り上げることができた。しかし反省点のほうが多く、まず施設の人とのコミュニケーションが上手くとれず言われたことしかできず自分から考えて行動することができなかった。この反省点をいかして残りの２日は養鶏場にいきました。そこでは気になったことはなるべく聞くように取り組んだ。そこでわかったことは、利用者の方々はほかの人より劣っている部分は多いが、その分ほかの人より優れているところがあり利用者の一人一人に個性と特徴がしっかりあることが分かった。またその優れているところで自分の劣っている所をお互いがお互いを助け合っている一つのチームとして働いていたところを見て利用者を見た目では判断してはいけないと感じた。

これらの６日間のサービスラーニングを終えて感じたことは、もっと自分の気持ちや意見をメンバーや施設の人に言うべきだったことだ。そうしなければ活動する上でただただみんなに合わせているだけでは貢献していることにはならないから、これはこれからの課題だ。しかしみんなに合わせていることで周りをよく見て行動したことで時折、ほかの人のフォローをすることができたのは成長したところだと感じた。そして養鶏場での活動で感じたことは利用者の人たちにも個性がありその個性にあった仕事をしてみんながしっかりと役割を分かって行動しているところを見て、どんな人でもまず同じ目線になってその人のことを理解しようとしなければいけないと感じた。なにより数少ない時間で暑い中みんなで助け合いながらもしっかりとやり遂げた今回の活動はとても楽しく達成感があり自分を成長できた良いサービスラーニングでした。

②活動を通して見えてきたこと

今回の６日間のサービスラーニングを通して見えてきたことは、今回の活動先の「むそう」だけでなくさまざまな福祉施設がいろんな形で地域に貢献し盛り上げていることがわかった。例えば「むそう」では毎年、地域のお祭りに利用者さんたちと一緒に作った屋台をだして地域に貢献していた。また養鶏場でも利用者さんたちがお互い助け合いながら作った卵は地域にでて売られている。このようにさまざまな福祉施設がいろんな形で活動し

ていて、支援をしながらも利用者さんたちと一丸となって地域に貢献している。またこの地域に貢献する活動をするには、もちろん地域の人たちの理解も必要である。地域の方々の理解と協力があってこそ活動できるということだから、そこには施設と地域との信頼関係が必要不可欠だと「むそう」での活動を通して感じた。これらから感じた今後の課題は、この地域とのつながりをさらに広げて更にいろんな活動をできるようにして利用者さんが活動するにあたって、選択の幅をさらに広げていくべきだと感じた。利用者さんたちはとても個性が良くも悪くも強く、確かに一人で何かをするのは難しいかもしれないが利用者さん一人一人の個性を生かしあうことで一般の人と同様またそれ以上の力を発揮できるのではないかと活動を通して感じた。だからこそ今の現状で満足して選択の幅を狭めるのではなく利用者さんたちの良い個性を支援者の人たちや地域全体で生かしていければもっと利用者の人たちが住みやすい地域になると感じました。

「自分が変われば、まわりも変わる」

15ff1564　木村優花

①自分自身の成長

私は自分自身で成長したと言えることが３つある。以下に順に述べていく。

１つ目は「メンバーと協力する力を身につけたこと」である。私には「何でも自分でやらないといけない」という考え方が強くあり、まわりと協力することが得意ではなかった。やってほしいことを頼みたくても今までの経験から、嫌がられるかもしれない、任せても任せたことをやってくれないかもしれないと考えてしまうのだ。しかし、サービスラーニングで一緒になったメンバーや研究時に一緒になったメンバーは、みんな部活で忙しいメンバーだったが「何かやろうか」と声を掛けてくれた。また「〇〇さんはこれをやってほしい」と何かを任せた時もしっかりやってきてくれたので協力して進めることが出来た。自分で何でもやらなくてはならないと考え、何もかもかかえてしまった結果、自分の許容範囲をオーバーして活動の質が落ちてしまう事が今までにもあったがこれからは相手をもっと信頼し、役割を分担して、お互いの状況を把握することで協力することを意識したいと思う。

２つ目は「外部の方とのコミュニケーションの取り方を知れたこと」である。私は「こうしなくてはならない」と考えることが多いのでどうしても固いコミュニケーションのとりかたになってしまう。固いというのはたんたんと話を進めるといったイメージである。そのほうがいい時はあるのだが相手の方がユーモアあふれる表現をしてくださった時私はその時にあった反応がなかなかとれないのだ。しかし、私のサービスラーニングのメンバーには施設の方と気さくに話し、しっかり言いたいことはいう人がいた。他のメンバーも堂々としていた。私にはないそれぞれのコミュニケーションの取り方をそれぞれが持っていて私自身メンバーのその様子から「こうやってもっとやわらかく話せばいいんだ」と学べた。

３つ目は「障害があっても、相手素直にみることが大切だと学べたこと」である。私は社会福祉法人むそうでサービスラーニングを行ったがその中でどの方が何の障害なのかはわからなかった。特徴的な行動をする方や突然大きな声を出す方、自分の仕事をし続ける方などいろんな方と会った。それぞれ違うのは当たり前のことでその方にあったことがある、情報の伝え方があるということを知った。それらは障害にとらわれていてはけして目を向けられなかったことだと思う。活動先の方が「相手の方はどんなひとなのだろうって普通に誰に対しても思うように、考えて接すればいい」と教えてくださって気づけた。相手を知ろうとすることが一番大切なのだと考えた。

以上のように、主に３つの学びがあった。いろんな人と交流したから学べたことばかりである。サービスラーニング中「何事も積極的に」ということを意識してきた。その分普段では学べないようなことを学ぶことができ、考えることが出来たのでサービスラーニングを行って本当に良かったと思った。私が周りから学んだように、私も周りに影響を与えているのだということを忘れずこれから行動したいし、学んでいきたい。

②活動を通して見えてきた地域の現状や課題

私は「障害に対する固定概念が地域にあり、住みやすい地域ではないことが地域の課題ではないか」と考える。以下にサービスラーニングを通してと、ユニバーサルデザイン（以下、UD）について調べてみての考え述べる。

まず、サービスラーニングでは知的障害や自閉症だと見受けられる方と交流した。私は一人の女性と一緒に行動することが多かった。はじめはどう関わってよいかわからずなかなか話せなかったがその方と交流する中で、その方の好きなことが分かった。他の方の様子も見させていただくと一人ひとりの方の得意なことや出来ること、難しいことが知れた。「〇〇という障害だからこの方は〇〇」という考え方も必要かもしれない。例えば障害を持つ子の親がどうしてうちの子は…と追いつめられていたとして「障害」はその親が納得し安心できる理由になるだろう。しかし、相手と関わるとき障害だけを見てしまったら何もできない。①で私が成長したことの 3 つ目にも述べたように相手を見ること、その方にあった方法を考えることが必要である。障害は障害として受け止め、一人ひとりを地域で知るようにすることが大切だと考えた。

次に、UD について調べて形だけの UD があると知った。セントレアは多くの UD があったが利用者の意見をきけば改善点は多くある。UD なので「誰にとっても良い」という部分が重要ではあるが、誰もが「もし私に聴覚障害があったら」「視覚障害があったら」「車いすだったら」と考え、意見を発信できるような工夫が必要だと考える。

私はセントレアについて調べるまでセントレアは UD が充実したところだと思い込んでいた。親にそう教わったからだ。私以外の多くの人も親やテレビからの情報でそう思い込んでいるかもしれない。自分にとって使いやすいと、どうしても他者の立場に立つのは難しい。しかし、普段から障害を持つ人と交流があれば自分のこととして考えやすいと思う。私もサークルで聴覚障害について考えているので普段から周りをみる。しかし大学に入学するまでは考える機会が無かった。地域で障害のある人も暮らしやすい仕組みを子どものころから考えたり、地域に実際に作って障害のある人も地域の一員として暮らせる仕組みにしたりすることで障害について考える機会が作れると考える。

身体障害と知的障害、精神障害は支援や工夫の仕方が異なってくると思う。しかし、どの障害においても「障害はこういうものだ」という固定概念が、支援者が満足するだけの支援や役割をはたさない UD を生み出す。障害を持つ方一人ひとりを知り交流することや、それぞれの障害について考えられる機会を作ることが大切なのである。